



時の流れを旅する

いっ しん でん じ ないちょう

一身田寺内町

市の北東部に「一身田寺内町」と呼ばれる古くからのまちがある。



「寺内町」とは町の名前ではなく町の形態を表し、真宗寺院を中心に、形成された^{ほり}濠などで囲まれた自治都市を言う。高田^{たか}本山^{だほん}専修寺^{せんじゆ}を中心に発展した一身田寺内町には、周囲にほぼ完全な形で環濠が残っている。

江戸時代、寺内町への入り口は3カ所で、そこには「黒門」「赤門」「桜門」と呼ばれる門があり、明け六つ(6時)に開けられ、暮れ六つ(18時)に閉められていた。

寺内町の中心である専修寺の^{みえい}広い境内でひときわ目を引くのが、御影堂・如来堂の二つの国指定重要文化財建造物で、このほかにも、寺社が多く残る一身田寺内町には、国宝の書跡をはじめ、多くの文化財がある。

専修寺の山門を出て南に向かうと、^{くぎぬきもん}釘貫門と石橋があり、そこを渡ると通りには、お寺ゆかりの商店が建ち並び、つし二階と呼ばれる古い二階建ての町屋や土蔵が残されている。

まちの表情は、その時々で大きく変わる。11月の一身田寺内町まつりや1月のお七夜には、多くの観光客が訪れ、大いににぎわう。

それに対して普段の一身田寺内町は、広々とした境内に静かにたたずむ荘厳な伽藍があり、一步まちに足を踏み入れると、昔の面影が残る空間が広がり、静かな時間がゆっくりと流れている。

(「広報津」平成19年11月1日号)



釘貫門から専修寺山門を望む